

1 前時の学習内容と本時へのつながり

前時で意識した点は、児童が既習事項を生かしてデータの特徴を捉え、代表値などを用いて問題の結論について判断していくための視点を増やすことである。統計的な問題解決では確定的な結論を得ることができないことがあるため、最終的な結論を導き出すことが難しい。しかし、明らかに平均値が低かったり、高い数値がなかったりするものを除外することは比較的容易である。多くの活動の中からいくつか絞っていく過程で、平均値や最頻値、平均値などの代表値や、ドットプロットや度数分布表などから分かるちらばりの様子を根拠として意見を交流することで、判断するためにはどこに着目していけばよいのかを実感することになり、本時の学習につなげていくことをねらった。

2 本時における児童の主体的な学びの姿とは

本時では、前時で絞られた項目を提示することから始めた。その中で1つだけ最終候補に残すか決まっていなかった活動があったことを確認し、どうするか意見を出し合った(図1)。児童からは「他の活動よりも平均値が低い」「最頻値が3点ということはそこまでやりたいと思う人が少ない」「5点が1人もいないから残さなくてよい」などの意見が出てきた。児童は平均値や最頻値、ちらばりの様子などの既習事項に着目して判断していた。さらに、最終的にどの活動に決めるとよいかを考えるためには根拠が必要であることをおさえ、それぞれがどの活動がよいか判断する活動に入っていた。ここで決まった活動は実際に行うことになっている。そのことも、児童が問題を自分事として捉え、主体的に考えていく姿へとつながった。

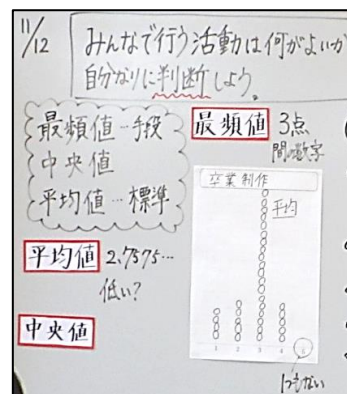


図1 導入部分の板書

3 本時における児童の対話的な学びとは

活動に入ると様々な代表値に着目して活動は何が適しているのかを自分なりに判断し、ほとんどの児童が自分の考えをもつことができていた。児童は最終的に1つに絞ることを目指しているため、自分の考えをもつだけでは問題の解決とはならない。周囲との意見交流を認めていたため、自分の考えがまとまった児童から自然と対話が始まっていた。そこでは自分とは異なる考えに対して共感したり、反論したりして互いに自分の考えを主張する姿が見られた。また、全体で交流する場面では、誰かが出した意見に対して付け足したり、質問したりしながら意見の交流を進めていた。対話を通して、児童は平均値や最頻値、中央値などの代表値、ちらばりの様子など、多様な視点で物事を捉えることで考えを広めたり深めたりすることとなっていた。

4 本時における児童の深い学びとは

意見の交流を終え、様々な考えに触れたあと、結論が決まったかを問うと児童から「まだ決めることができていない」という発言が出た。その理由を問うと、児童からは様々な意見が出てきた(図2)。さらに、どのようにしたら改善できるかという問いにも、「基準を決める」「目的を明確にする」「アンケートの点数を変えてもう一度実施する」などの意見が出てきた。新たな課題を見つ

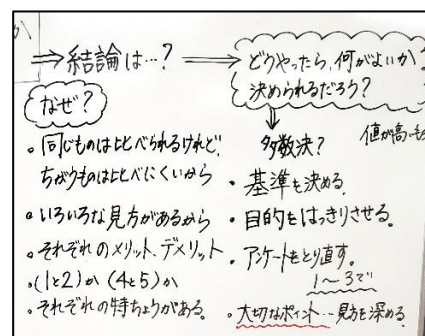


図2 終末部分の板書

けることで、統計的な問題解決についての理解を深めた場面であった。また、振り返りには「みんなが思うポイントを入れてさらに深く考えていきたい」「目的を確かにしてから決めるのがよいと思った」などが書かれており、学びの深まりを感じることもできた。